法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-02

<報告>廣末保の仕事

田中，優子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
101
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
13
(発行年 / Year)
2020-03-24

〈報告〉

廣末保の仕事

田中　優子

1　ダイナミズムの発見

廣末保先生は一九一九年に高知で生まれた。そこで今年は生誕一〇〇年ということになる。

三〇歳の時に執筆した書評がある。野間光辰著『西鶴新攷』に関する書評で、一九四九年の『日本文学』に掲載された。[1] 活字になったものとしては二番目の、ごく初期の文章である。それは、野間光辰への痛烈な批判であった。研究者は、他者の研究への批判がいかなる意味をもつか、とりわけ若いときにおこなう批判がどのような働きをするのか、推測がつくであろう。それは年上の研究者の力を借りて、その研究者とは異なる自己の言葉を、おのれの深いところからつかみ出す作業なのである。

いわく、『西鶴新攷』は「西鶴を現象的な姿勢の場で、静止的にとらえてみせている」に過ぎず、「西鶴を突き動かし、又作家としての西鶴の主体形成を必然ならしめているもの」を忌避している、と。批判の的は「静止的」なとらえ方にあった。廣末保はその対極に、西鶴の散文の「動的な主体性」を見ていたのである。この文章の中には、西鶴を評して「散文に突き動かされる」という表現がある。廣末保の西鶴論の基本がすでにここに書かれていた。

廣末保の仕事の第一の特質は、文学を生き物のように動的なものとして受け止める方法をもったことであった。人間にとって生きることがそうであるように、読む者を惹きつける文学は、ひとつの言葉が次にどこへつながるか、読む者をどこへ連れて行くか予想できない、不安定で動的な躍動感そのものである。廣末保の仕事は、そのことを気づ

かせる仕事だったのである。それは同時に、言葉を読み、聞く人間というものが、その言葉を単に意味として受け取り解釈しているのではなく、己の内部で刻々と創造し続けている、という事実の発見であった。それは「文学を私たちが読むということはどんな作業なのか」という、西鶴を通してきわめて普遍的な問題に迫ったということだった。

廣末保の絶筆に、「自己完結的な古典志向を拒否した上での選択[2]」という文章がある。そのなかで廣末保は芭蕉について「何よりも私を震撼させるのは、その付け合いが不安定な存在感に耐えながら向いあっているということである」と書いた。また、「放棄」「存在と非在のあわいに賭ける」という言葉も書きつけた。さらに西鶴については、「離陸しきることもなく着地することもない西鶴の俳諧的文体も同様、自己自身において完結することを拒否している」と書いた。すなわち「未完の方法」である。どんな文学でも読む者が言葉に出会い自分自身の中で創造し続けることができる、というわけではない。作者自身が不安定で動的な言葉を選び運び続け、それを決して完結させない、という方法をもっていればこそ、それが可能だ、と言っているのである。廣末保は、そのような言葉の創造が社会状況と呼応していたと考えた。そこで、芭蕉と西鶴のいた時代そのものが「転換期」である、という位置づけになる。廣末保の発見は、そういう意味で、文化史上まれな時代としての元禄期の発見でもあった。初期の文章と、絶筆となった文章は廣末保の仕事の核心として、見事に呼応している。

「言葉を読み、聞く人間というものが、その言葉を単に意味として受け取り解釈しているのではなく、己の内部で刻々と創造し続けている」という事実が第一の発見であるとすれば、「未完の方法」は廣末保の第二の発見であった。その第二の発見が、第一の発見を可能にしている、という構造である。この「未完の方法」は単に個人の中での未完の方法というだけではなく、言葉の創造が社会状況と呼応していた、という発想から、元禄時代が転換期である、という第三の発見に至ったのである。

2　デュアルな展開から言葉の躍動が見える

廣末保は主に井原西鶴と松尾芭蕉の文学から、転換期の文学のもつその特質を明らかにしようとしたのだが、そのためには重要なことを乗り越えねばならなかった。それは文学内部においてジャンルを分けている境を取り払うことである。西鶴の散文が俳諧の方法によって書かれていることは、今では多くの人が理解できている。それは廣末保によって明確に言語化されたからである。

たとえば『西鶴の小説[3]』では、西鶴の特徴である「短編群の集合体」の方法について、編を個々の作品として読むことはできるが、「そんなふうに読んでしまっては読めない何かがあり、その何かを読まないかぎり、西鶴を読んだ

ことにはならないような書き方を西鶴はしている」と書いた。ここには「読み方」の問題提起がある。短編を個々の作品として読むことはできる。だからその読み方は否定しない。しかしそれでは何かが隠されることになる。読む豊かさを受け取りそこなう。これは、読む方法はひとつではない、と言っているのだ。ということは、私たちは文学を読むとき、意味を理解したとしても、何か大事なものを見失っている可能性がある。その大事なものとは、「ストーリー」や「言葉の意味」の向こう側にあるものだ。それは「言葉そのもの」なのである。

小説を読むとは、ストーリーを読むことではない。言葉と出会うことである。それをとことん知っている作者であるからこそ、時代を超えて人が出会える言葉を、そこに置くことができた。こうして、「小説」と「詩歌」（ここでは俳諧）、というジャンル区分をすることは意味がなくなる。どちらも、言葉に出会う体験の場だからである。まさに、「読むということの意味が、そこでは変えられねばならない」のであった。

文学を研究する者はしばしば、これは詩である、これは歌である、俳諧である、小説であると分類し、分類するとわかったような気になってしまう。しかし、分類を超える方法を、廣末保は実践した。真に言葉に出会う体験、もしくは文学に出会う体験があれば、それ以後、もう分類はできない。廣末保はそのような地平で芭蕉も西鶴も近松もみてきたのである。しかもその「短編群の集合体」作品は、それ自体も閉じていないことに、気づくことになる。そこには「量の文学」「量的に増殖しつづける発想」という、さらなる発見があった。

「量の文学」とは、単に多作であった、という意味ではない。実際に多作なのだが、そこにだけ注目すれば、その理由は当時の出版ジャーナリズムつまり市場にある、ということになる。しかし廣末保は「そこに還元できない」と言う。この「還元できない」という書き方も、廣末保の重要な方法である。量の文学はジャーナリズム市場の事情にあることは否定しないが、そこに「還元できない」ので、他に理由がある。それは西鶴の方法が「意表をつき転調しながら増殖していく運動」であることだ。それを同時に見なければならないのである。

この「還元できない」という書き方は、俳諧と文章の関係についても使っている。なぜ西鶴の文章は「俳諧的」なのか？　それは、俳諧師の書いた文章だから俳諧的になった、という職業ジャンルには還元できない。「転調しながら増殖していく運動」であることが、俳諧という運動だからなのである。

廣末保の文学論は、常にデュアル（二元的）に展開する。「～は否定しないが、実はそれとは異なるこういうものが潜んでいる」「～には還元できず、実はこういう躍動がある」という展開の方法をもつ。そこから多くの発見がなされた。

まさに文学の豊かさとは、読みの方法の批判的な営みから発掘されるのである。しかもそれは方法論を書くことでなされたのではなく、作品に密着して言葉のひとつひとつと出会っていくドキュメントによってなされたのだった。『西鶴の小説』は、読みのドキュメントである。

この「読む」という作業の中で分析をしてしまうと、分析をしたことに対して名前を付けることになる。名前を付けると安心してしまうのだが、それだけでなくさらにいくつも名前をつけてそこに還元しようとする。分類を細かくしてそこに押し込めようとする。ところが実際にはどれほど詳細な分類にも還元できない。還元してしまうと、そこから大事なことが漏れてしまう。そこで、一つを言いながら、別のことを同時に語るということが、重要な方法になる。

廣末保は近松門左衛門の『心中天の網島』を使って、やはり言葉に出会っていくドキュメントを書いた。[4] そこでも、ジャンルは超えられていく。文学なのか浄瑠璃なのか演劇なのか、という問いは意味をなさない。「近松は〈語り〉のことばを演劇のことばにしたが、それは、〈語り〉のことばによって始めて可能な演劇を書いたということであった。そしてそれを義太夫節が聴覚的に舞台化した」（『心中天の網島』）と。ここで言われていることは、〈語り〉と演劇と義太夫節という、還元できないものをつなげていくことである。それを現実にやった人がいる、それが近松だ、と言っているのだ。近松におけるデュアルな構造を示したのである。言葉で書かれたもののジャンル分類を「意味がない」と論ずるのはやさしいが、それでは既成概念は壊れない。廣末保は誰もが立ち会う、本を読む時間、あるいは劇場において体験するその時間を共有することで、ジャンルを超えていったのだった。

私は近世文学と遭遇する前に、法政大学文学部日本文学科の中で近代文学を専攻していた。同時に教養課程のなかで言語学に出会い、構造主義を中心とする言語学を吸収していた。そこでは、文学や歴史や人類学といった学問ジャンルそのものではなく、その根底にある「言葉」といかに出会っているのか、というテーマが常に設定されていた。ソシュールはもちろんのこと、チョムスキーの生成文法にもロマン・ヤコブソンの音韻学にも挑戦したが、それらをもってヨーロッパの文学の豊かさに迫ろうとした文学者たちの存在からは、とりわけ影響を受けた。たとえばロラン・バルトの『S／Z』はまさにそういう文学論だった。分析だけではなく文学というものを、「読む」という行為がどういう行為なのかということを基本にして、考えている著書であった。そのような学びの経験があることで、私にとって廣末保のこの論じ方は非常に納得できる、近しいものだった。

違いがあるとすると、バルトは言葉を「サンタグム」と「パラディグム」の側面に分けて分析したことである。「サ

ンタグム」とは言葉と出会い、それが次の言葉につながっていく線的な動きのことである。線的につながっていることで私たちは理解できる。しかしそれだけでは、意味を形成しない。「パラディグム」とは、線でつながっているひとつひとつの言葉が、その背後にもつ無数の歴史的使用や極めて豊かなニュアンスと深みのことである。単なる辞書的な意味のことではない。たとえば歌枕のように、その言葉に、使われてきた歴史と想像力と感性が全て入っている言葉群がある。私たちは、線的に読んでいる間に、知っていれば知っているほど、ひとつひとつの言葉から極めて大きな情報や感覚が湧き出てくるのを、とどめることはできない。その湧き出てくるものをつかまえながら、それを線上にとどまらせて読んでいくのだ。バルトはその掛け合いを時に楽譜のようなもので表現した。

俳諧の場合、前の人が詠んだ言葉の背景を豊かに捉えることができる人は、次の句を深く面白くつけることができる。それと同じことを、人が文章を読む際にも現実におこなっている。しかも歴史だけではなく、五感、環境、身体的な状態など様々な要素をそこに感じ取る。そこには音も入っている。だからこそロラン・バルトも楽譜を使ってみたのである。このように読みの方法について考え追求しながら、やがて私は近世文学と出会っていった。

しかし芭蕉や西鶴を論じるときは、バルトのような方法では見失うものがある。それは「スピード」である。西鶴の場合は、視覚の動きが早い。まるでカメラが動き回るようだ。スピードが増殖を引き起こす。芭蕉の俳諧の場合は、次の人に受け渡されたときの、意味の転換スピードである。廣末保は元禄文学のなかに、「転調しながら増殖していく」スピードを発見した。この速度、という側面は日本の近世文学の特質であるのだが、それまで論じられることはなかった。ゆっくり読んでも速く読んでも同じではないか、と思うかも知れないが、そのスピードのことではない。読んでいるときに、頭の中で様々なことが展開する。そこに起こる展開と想像のスピードのことである。「転調しながら増殖」する際のその速度のことだ。

私は上田秋成の読本で『S／Z』の方法を実験した。近世中期に出現した読本の特徴は速度ではない。中国の俗語や日本の平安期の文学や歴史叙述が、近世の言葉の中に溶解しまじり合うめくるめく世界である。その言葉の発見には、パラディグムの分析が必要だった。そこから考えると、近世文学は近世全体に共通の特徴があるわけではなく、近世の中のより短い時代の特徴がある、ということになる。それぞれの時代は、明確にきっちり切り分けられる性質のものではないが、ある時代に特徴的に現れる方法は確かにある。近世文学研究は今後さらに、より短いスパンのなかで、その方法を考えなくてはならないだろう。少なくともジャンルごとに分析するより、短い時代ごとに通ジャンル的に見渡すほうが、文学論としては実り多いものになる。

廣末保は、そのことの重要性も発見した。読本の分析をする、演劇の分析をする、というジャンル研究になりがちだが、元禄時代はどんな時代だったか、どんな文学が生まれたのかと、その時代で通ジャンル的に見たほうが理解できる。近世文学も近代文学も、その研究がさらに必要であろう。

3　遊行・悪場所との遭遇

この小見出しにある「遭遇」は、私にとっての遭遇である。私は石川淳のエッセイと小説から近世文学に入り、言語学や構造主義文学論やフランス文学をいつも脇に置いていた。そういう大学生だった私にとって、廣末保の講義は驚きの連続であった。どういう驚きだったかというと、「まったく分からない」という驚きである。むろん石川淳の江戸文学論なら理解できていた、という意味ではない。多くの知識をもって学問的に論理的に理解、などしていなかった。そもそも私は近世文学とは全く無縁無関心な状況で大学に入り、小田切秀雄ゼミで近代文学を学んでいたのである。近世文学のみならず、江戸時代社会についてもほとんど関心はなく、古典の文章もよく読めなかった。しかしながら、石川淳の江戸文学論は「理解」はしていなかったが、衝撃的に「核心をつかんだ」「分かった」という感覚をもった。だからこそ、どうしても近世文学研究に進みたかったのである。自分が何をつかんだのか、何を分かったのか知りたい、という熱望が渦巻いていて、その火を消すことができなかった。

知識をともなった近世文学の理解に至るのがいかに険しい道か、それを痛感させられたのが、廣末保の学部における講義だった。理解できなかったが、そのとき廣末先生が何を話しておられたのは、はっきり覚えている。それは「遊行ということ」である。漂泊、遊行、悪場所が、廣末保の文学論の根幹であることは、周知のことであろう。そのころ私が分からなかったひとつの理由は、これらのテーマに関して、廣末保は近世を中世の側から見ていたことである。近代から近世を、それも江戸という都市の「連」の現象に心を奪われていた私には、逆方向から近世を見ているその視線が見えなかったのだ。とりわけ、芝居町や遊郭という悪場所の起源が遊行にある、という時間的な因果関係が見えなかった。

分からなかったもうひとつの理由は、遊行と定住という対比が、廣末保という人の根底にあるからだった。これは中世の連続線上にあるだけでなく、廣末保が生まれ育った場所で、実際に体験していた定住民と遍路との関係に関わっていることを、後に理解することになる。廣末保は、自身が定住民として、遍路たちをみつめていた。それは今の観光的遍路ではない。病に陥り、あるいは傷つき、わずかな再生を願って這うように歩く人々の姿である。一九七

二年九月の「月刊百科」（平凡社）に、廣末保は「旅の境涯」という一文を寄せており、このように書いている。

> 遍路の往き来は多く、日になんにんも家の門（かど）に立った。その白装束の遍路を、お遍土さんといかにも親しげによんだ。しかし、子供心にも自分たちとは別の世界の人だと思っていた。有難い人のようでもあり、気の毒な人のようでもあり、恐ろしい人のようでもあった。[5]

お遍路さんを家ではどう迎え、どう感じていたかは、廣末先生ご自身からも何度か伺っている。しかし次のような感じ方は直接語るのが困難であるからだろう。聞いたことはなく、後に文章で知った。それは菜の花が咲くころの雨の降る日だった。小学生の「私」が町はずれの田舎道を歩いていると、向こうから白装束の遍路がひとり歩いてくる。そのとき、「急にその道が見馴れたいつもの道でないような気がした」のだった。それからは「かれらが自分たちとはちがった道の上を歩いているように感じだした。かすかなそれは衝撃でもあった。私は怯え。しばらくのあいだ、遍路を道で見かけると脇道にそれるようになった」と。

それからというもの、「旅に出る」という言葉を聞くと「異質な時空としての道」として「遍路の道」を連想するようになり、やがてそれは「此岸の時空」と「異質な時空」の対比につながっていった、という。それは歴史学でいうところの「定住民」と「遊行民」の二分類を前提にしてはいるものの、それだけではない。また遊行僧、歩き巫女、山伏、遍路などは宗教世界と結びついた存在ではあるものの、やはりそれだけではない。廣末保はそこに、他の誰も提起しなかった側面を発見した。それは「詐術」ということである。

漂泊の民は、「恐れと蔑視の複合した定住民の意識」に「乗ずる」すべをもっていた。定住民の恐れと蔑視をひとつの手段として、彼らは定住民の罪障を担う。担わせたほうのうしろめたさは、金銭という形になって受け渡される。そのような、担い担わされる「不可分の関係」がそこにあることを見抜いた。「定住」と「遊行」は宿命的な「関わり」であって、「分類」ではないのである。廣末先生は、「大学の教師は学生をだまして生きている」とおっしゃったことがある。衝撃的だったので、よく覚えているのだが、忘れられないもうひとつの理由は「これは真実かもしれない」と思ったからだ。師と弟子の関係も、芸能民と観客の関係も、遊女と客の関係も、商人と顧客の関係も、「詐術」という言葉で語ることのできる側面が必ずある。旅と漂泊の問題は、一方で芭蕉論の根幹を成し、もう一方で悪場所論の根幹を成した。

神霊をにない、神語を説き。神に扮するものたちの

多くは、巫女や神人や遊行宗教民であった。つまり、かれらは、鎮送呪術家であるとともに、死霊のよりましでもあったのである。怨霊をあらわし、あるいは自ら扮し、そして管理・鎮送するといった二役三役をうけもつことで、定住民の精神的不安に協力し、同時に呪縛したというわけである。（『もうひとつの日本美』[6]）

廣末保はこのように、定住民と遊行民の不可分の関係の中に「悪所」を置き、歌舞伎役者をこのような遊行民のひとつのありようとみた。そこに「河原者」という賤民視された者の精神的優位がある。説経に登場する小栗判官やづし王のありようも、それを語る説経の芸能民たちも、定住民たちとのあいだいに「協力」と「呪縛」の関係があった、と廣末保は考えた。

むろん遊女も同様である。遊女はそもそも遊行芸能民であり、漂泊の民として各地を移動した。舟で移動し、港や河岸で働くこともあった。後に芸能をもった「踊り子」と、遊郭に定着する「遊女」とに分かれるが、遊郭は芝居町とともに悪所であった。それは賤民視された漂泊者たちの生きる場所であったからだ。遊行が定住となり、それでも賤視の記憶をとどめて都市の悪所を形成し、その空間に前代未聞の富が飛び交い、その三都の富をもって近世文化を作り上げていったその歴史的時間を、廣末保は切断することなく見せていった。

当時、歴史家の網野善彦が新しい中世観を提示していた。定住する農民とは異なる多様な遊行の民が中世にも近世にもいたこと、戸籍上は農民であっても実際には非農民として移動しながら生きている人々がいたことを、明確にしたのである。廣末保は網野善彦と親交があり、中世遊行民から定住していくことで近世の生活と文化が出来上がっていったこと、しかしながら芭蕉のように、遊行民としての生き方を意識的に選び取る者がいたことに注目していた。網野善彦と廣末保は、歴史と文学という位置で、同じところを見ていた。

しかし全く同じというわけではなかった。『生誕百年廣末保の仕事』に寄稿した高橋昌明は「廣末保と絵金」のなかで、重要なことを書いている。

二人には明らかに共通する議論の対象があったはずだが、網野には、廣末のような遊行漂泊の呪術的な芸能者が、定住民を脅かす不気味さゆえに、蔑視の対象であるとともに畏敬の対象であったという視点が弱く、非農業民の本来的な自由の強調と、非農業民と農業民を高い視座から鳥瞰し、二項対立的に概念化するにとどまり、両者の葛藤と侵し侵される関係、定住民の呪術的な芸能者・宗教者にたいする蔑視と畏敬というアンビバレントなまなざしについて、ほとんど関心がないかの如くであった。[7]

この言葉は、網野善彦との対比において廣末保の本質を言い当てている。江戸時代における「悪所」の成立は、単に徳川政権や儒学から見た「悪」というだけでなく、悪のそもそもの意味である過剰なエネルギーという意味もまといながら、脅迫的な悪意がその根底にあるのだ。絶大な権力への対峙が必ず帯びる「悪」は、自由への力でもある。

廣末保は、文学ジャンルを超えて言葉の方法を発見し、同時に、歴史的なダイナミズムこそが、今そこに生きる人々の根拠となっていることを示した。しかしそのような短い言葉でとてもまとめることはできない。言葉に出会うドキュメントとして極めて新しい方法をもった廣末保の文学論を、じかに読んでいただくしかない。

4　廣末保を読むために

『廣末保著作集』全十二巻は、一九九六年十一月より影書房から刊行された。『元禄文学研究』（第一巻）『近松序説』（第二巻）『前近代の可能性』（第三巻）『芭蕉』（第四巻）『もう一つの日本美』（第五巻）『悪場所の発想』（第六巻）『西鶴の小説』（第七巻）『四谷怪談』（第八巻）『心中天網島』（第九巻）『漂泊の物語』（第十巻）『近世文学にとっての俗（未収録論文集）』（第十一巻）『遊行の思想と現代（対談集）』（第十二巻）である。

非常にシンプルで美しい表紙カバーには、各巻ごとに廣末保自身が撮影した写真が使われている。白い和紙様の表紙に印刷されたモノクロームの写真は、その一枚一枚がまるで崩壊しつつある世界のように、非常に強いインパクトで迫ってくる。できることなら、これらを集めた写真集も欲しい、と思うくらいだ。首だけになったくぐつ人形、胴体だけのもの、足や手がばらばらに離れているもの、年月を経て黒ずんだもの、あるいはかろうじて伝承され、太夫の腕の中でぐっと下を見据える女の人形。そして口寄せをするいたこ、無惨な廃屋等々。

廣末保を読んだことがあれば、これらのモノクロ写真が廣末保の世界そのものだということに気づくだろう。壊れゆく遊行の世界、まとまりのつかない表現の断片、あの世から訪れてまた帰ってゆく死者の語り――何ひとつとして堅固なものはなく、何ひとつとして不変不動のものはないのだが、その個々の断片は瞬間に集まり、燃え上がるように物語を語り、そしてまた断片に帰ってゆく。消え去り、旅立ち、たゆたい、そしてまた訪れる。

本をあけると、カバーの折り返しの下方に写真の説明がひとことある。一九六三年に撮られた佐渡の文弥人形。一九六四年に撮られた宮崎県柚木野の人形の胴体。宇佐古表（こひょう）神社の神相撲人形。一九七一年ごろに撮られた信州人形。そして、佐渡金山の廃坑、恐山のいたこ。消えゆく世界のスナップショットだ。全集を読むだけでなく、

これらの写真をぜひ見ていただきたい。

注

（1）「野間光辰著『西鶴新攷』――その「西鶴の方法」について」（「日本文学」一九四九年十二月号初出。『廣末保著作集』第十一巻所収）

（2）「自己完結的な古典志向を拒否した上での選択」（「季刊・リテレール」一九九三年夏号初出。『廣末保著作集』第十一巻所収）

（3）『西鶴の小説――時空意識の転換をめぐって』（一九八二年平凡社刊。『廣末保著作集』第七巻所収）

（4）『心中天の網島』（一九八三年　岩波書店刊。『廣末保著作集』第九巻所収）

（5）「旅の境涯」（「月刊百科」一九七二年九月号初出。『廣末保著作集』第十巻所収）

（6）『もうひとつの日本美――前近代の悪と死』（一九六五年　美術出版社刊。『廣末保著作集』第五巻所収）

（7）高橋昌明「廣末保と絵金」（『生誕百年　廣末保の仕事』二〇一九年　法政大学国文学会）

付記

本論考は『生誕百年　廣末保の仕事』に寄稿した「廣末保の仕事」および「書評『廣末保著作集』」を編集・加筆したものである。

（たなか　ゆうこ・本学総長）